

明治大学における周年事業の歴史と大学史担当セクションの関わり

阿部 裕 樹

はじめに

明治大学は、一八八一（明治一四）年に前身である明治法律学校が開校して以来、二〇一一（平成二三）年で創立一三〇周年を迎える。これまでも、節目ごとに周年事業が開催されてきており、その変遷を確認することは来る創立一三〇周年事業の企画・運営について議論する際に有益な材料となる。

また、あわせて周年事業において実施された大学史関係の事業を確認し、その内容と変遷を明らかにしたい。この作業は、一三〇周年事業において明治大学史資料センターが果たすべき役割について考えるための準備作業となる。

そこで本稿では、明治大学（前身の明治法律学校を含む）を事例として、前半部で周年事業の概要について確認する。後半部では、周年事業のうち大学史関係のものを抽出し、その内容と、これを担った大学史担当セクションについて確認したい。

その際、具体的に事例とする周年事業は、創立二〇周年、三〇周年、五〇周年、六〇周年、七〇周年、八〇周年、一〇〇周年、一二〇周年の各事業とする。もちろん、明治大学における周年事業はこの限りではない。学部やサークル主体の周年事業もおこなわれている。ただし、事業の規模が比較的大きいこと、あるいは当時の

学内事情や社会背景に特徴が見出せること、そして一三〇周年事業の参考となる点があることなどの理由から、対象を限定している。

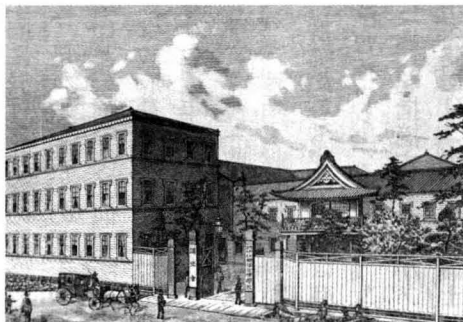
また、ここである大学史担当セクションとは、周年事業において大学史関係の事業を企画・運営する主体となった組織、あるいは個人を指すこととする。したがって、学内法制上の位置づけ等は一様ではない。

一 周年事業の概要

（１）二〇周年

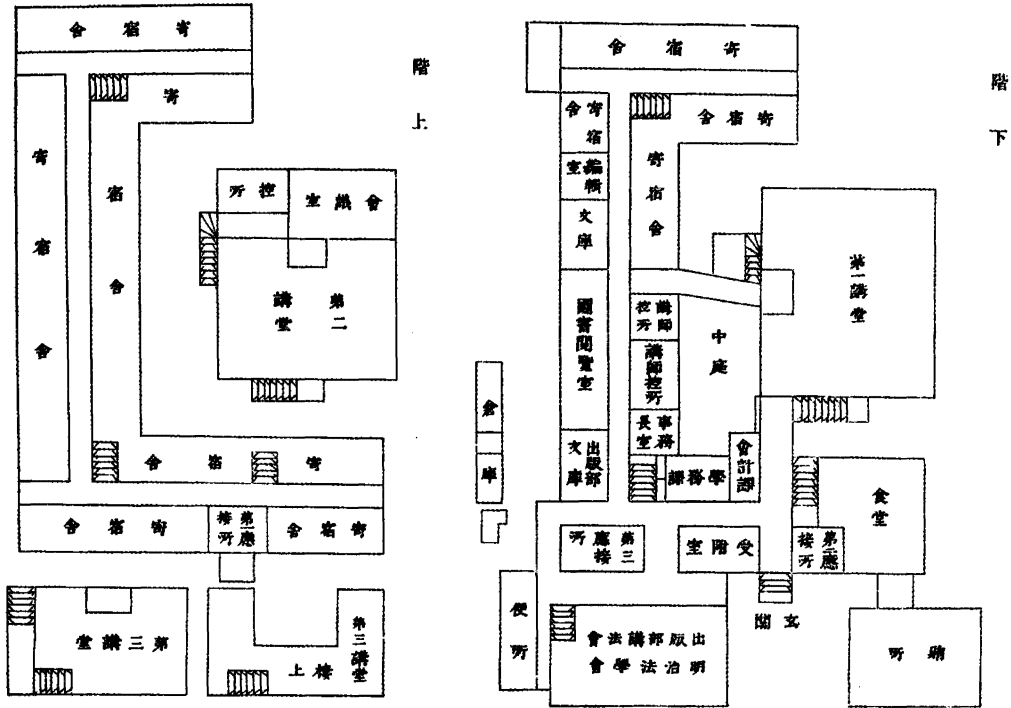
まず、明治大学における初めての本格的周年事業である創立二〇周年事業について見てゆきたい。事業の内容は記念式典の開催と『明治法律学校二十年史』の刊行であった。

記念式典は、一九〇一（明治三四）年七月六日（土）に、当時の南甲賀町校舎第一講堂において、第四〇回卒業式とともに催された。創立者のひとりであり当時



南甲賀町校舎（1894年）

校舎平面図
(六、百、分、ノ、一)



南甲賀町校舎配置図（『再版 明治法律学校二十年史』より）

校長であった岸本辰雄は、式辞で「仏国に於ける法学の隆盛及權利思想の普及を見て、大に健康に堪えず、是れ余輩若干の同志が、微力自ら揣らす、敢て本校を創立」したこと、開校後は他の法律学校との競争や民法典論争の敗北、あるいは政府補助金がなかったことなど「逆境又逆境」であったこと、しかし近年では「自助自立の志を操り以て本校清健の学風を扶殖」しており、「敢て二十年記念式を挙ぐる所以」があると述べている。

岸本が、学校の歴史をネガティブな事例からポジティブに回顧した背景として、当時の明治法律学校が法曹養成という点において質量ともにひとつのピークを迎えていたことを指摘する必要があるだろう。例えば、同時開催の第四〇回卒業生には「人權派弁護士」山崎今朝弥がいたし、前後して尾佐竹猛、布施辰治、平出修、吉田三市郎といった著名人が明治法律学校を卒業している。判検事や弁護士試験の合格者数についても、『明治大学百年史』第三巻所収の「高等文官試験・判事検事登用試験・弁護士試験合格者数一覽」(第6表)を見れば、明治法律学校および明治大学の高い位置が明らかとなる。このような学校の実績は関係者の自信ともなり、大学昇格のひとつの動機となったようである。大学昇格は、二年後の一九〇三年に、専門学校令に基づくものであったが、結実している。

式典には、司法大臣清浦奎吾、司法総務長官波多野敬直、司法省民刑局長倉富勇三郎、大審院長南部亀男、東京商業会議所会頭渋沢栄一らが来賓として出席した。明治法律学校開校当初の講師であり、当時枢密院議長であった西園寺公望は欠席だったが、岸本にあて「貴校ノ隆盛至今日候事実以雀躍不啻候」という手紙を認めている。

『明治法律学校二十年史』は、当時の学校機関誌『明治法学』記

者である田能村梅士によって著された明治大学にとつて初の年史で、創立期の明治大学を知る基本文献となっている。なお、年史編纂等の大学史担当セクションの周年事業への関わりについては、本稿後半部で述べたい。

なお、翌一九〇二（明治三五）年より一月一七日を創立記念日として休日とした。この休日は現在にまで受け継がれている。

（2）三〇周年

ここでは、創立三〇周年事業について、「史料1」を参照しながら見てゆきたい。事業は、一九一一（明治四四）年一〇月一四日から一八日、および二六日の都合六日間の会期で開催された。

〔史料1〕『駿台会誌』第五号（一九一二年二月一日）

憶ふ昔、明治十四年の春、母校が始めて呱呱の声を学界の一角に挙げてより爰に春風秋雨將に三十年に垂んとする一昨年の秋九月、母校は更に宇内の文運に伴ひて一大発展を画し、新に駿河台上高燥の地をトして宏壮なる校舎建築の工を起し、爾後銳意之が工を續けて昨春一月十七日創立滿三十年の紀念に至りたるも當時尚記念館其他の工事未だ完成せざりしかば、其完成の日を俟ちて、十月十四日校舎新築落成移転式并に創立滿三十年記念式を駿台の新校舎に挙げ以後六日間に涉りて盛大なる祝典を挙行したり。

当日、母校所在地たる神田町各町は特に母校の為に熱誠なる祝意を表せられて、各戸其軒頭に日章旗と祝明治大学記念式と記せる提灯とを掲げ、就中小川町、神保町、甲賀町、猿樂町等

校舎に近き街衢の裝飾は頗る華麗を極め、母校正門前に巍峨として聳立せる大緑門及鉄柵を連ねて飾れる装ひと相映じて、駿台の辺り兀焉として現出したる一大偉觀は洵に是れ近來稀に見るの快心事にして、是れ瞻ては母校が嶄然として、一頭地を都下官私の大学界に抽出し、邦家人文の發達進歩に貢獻するの多大なるを思はしめ、誠に人意を強からしむるものありたり。今、左に六日間に涉りて舉行せられたる盛典の順序をのみ揚げむ。

第一日 十月十四日

記念式（午後二時より）

提灯行列（午後六時より）

第二日 十月十五日

大演説会（午後一時より）

活動写真展（午後六時より）

校友懇親会校友会主催（午後六時より於上野精養軒）

第三日 十月十六日

校舎縦覧（午後一時より）

此日校舎の内外数ヶ所に余興場を設け、手品、岩デコ、百面相、講談、劍舞、薩摩琵琶、太神楽、独楽廻し等を演ぜしめて一般觀覽者の為に興を添へたり。

大演説会雄弁会主催（午後六時より）

第四日 十月十七日

陸上大運動会（午前八時より於柏木グラウンド）

第五日 十月十八日

学生相撲学生有志主催（午前九時より）

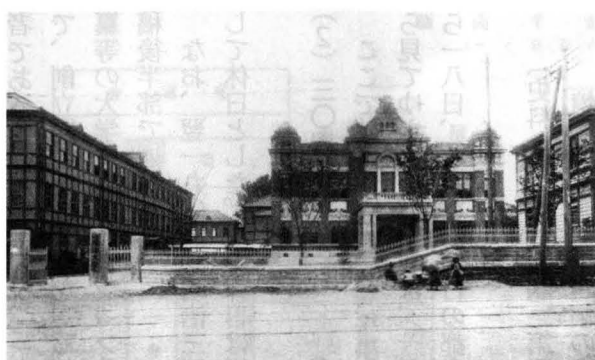
第六日 十月廿六日

音楽大演奏会（午後二時より）

『明治大学百年史』第一巻、六九一～六九二頁

記念式典は、一〇月一四日（土）に、初代記念館講堂において催された。おもな来賓は「西園寺首相、長谷場文相、石本陸相」をはじめ、二〇周年記念式典にも参列した南部亀男、渋沢栄一らであった。

ところで、会場となった初代記念館講堂は、大学の「一大発展」を期して整備された校舎であった。つまり明治大学は、一八八六（明



駿河台キャンパス（1911年）

治一九）年以来同じ駿河台でも南甲賀町（現在の日本大学駿河台キャンパスの一部）に校舎を構えていたが、施設の拡大のために現在の明治大学駿河台キャンパスの地に移転したうえで、校舎を新築したのである。二〇周年事業の際にも指摘したが、明治大学は法曹養成の面において実績をあげていたが、逆に施設面の整備は充分とはいえない状況が続いており、三〇周年という節目を契機として施設整備を推進したのである。このような周年事業を契機とした校舎新

築・整備は後の周年事業においても見受けられる。なお、「史料1」からは、三日目に校舎の見学会（「校舎縦覧」）がおこなわれていることも読み取れる。

事業としては、演説会、写真展、新設の柏木グラウンド⁸等におけるスポーツイベント、音楽会等が開催されている。このような一種のお祭りのイベントを実施することで、学生・校友・教職員が楽しみながら祝意を共有できるような意図がうかがえる。

また、住民が日章旗とともに明治大学の提灯を掲げたことや、一部の事業が「一般観覧者」に開放されていた点から、地域住民との交流についてもうかがえる。地域との連携についても、やはり後の周年事業に継承されている。

また、「史料1」からは確認できないものの、三〇周年を期して『明治大学史』⁹が刊行されている。内容は『明治法律学校二十年史』に以後の一〇年分を増補したものであり著者も田能村梅士である。

以上から、創立三〇周年事業が、二〇周年時と比較して種類が増え、規模を拡大していることは明らかである。施設整備、大学史関



創立30周年記念写真（1911年）

係を含む学術やスポーツイベントの実施、近隣住民との交流といった内容は、後の周年事業に継承されており、その意味で今日イメー
ジされる周年事業の原型と考えていいだろう。

（3）五〇周年

ここでは、創立五〇周年事業について、「史料2」を参照しながら見てゆきたい。事業は、一九三二（昭和六）年一月一日から八日の会期で開催された。

まず、五〇周年記念事業の前提として、当時が関東大震災による校舎の壊滅的被害からの復興期にあたるという歴史的背景を指摘しなければならない。^⑩ 明治大学では、震災後ただちに仮校舎を整備したが、大正時代末から昭和初年にかけて予科一号館（一九二六年竣工）、大学一号館（一九二七年竣工）、三代目記念館（一九二八年竣工）、体育館（一九二九年竣工）を次々に新築していた。ちょうど創立五〇周年を迎える一九三二年は、課題として残されていた「図書館建設」が推進されていた時期であった。

〔史料2〕創立五十年記念祝典関係書綴

一、記念式 一日（日曜）

イ、挙式 午前十時 於 記念館大講堂

（中略）

ロ、式後供餐 午後零時半

（中略）

ハ、余興 午後一時半

映画「若人明治」、明大ハーモニカ・ソサエティー演奏、

明大マンドリンオーケストラ演奏、明大虚竹会演奏、

花火打揚

二、参列者

首相、文相、法相、商相、各国大公使始メ本大学関係
来賓、校友、学生総代等三千名

二、記念大講演会 二日（月曜）午後一時

於 記念館大講堂（公開）

イ、講演者

本大学教授法学博士尾佐竹猛、法学博士米田實、太田
黒敏男ノ三氏

三、学生祝賀会 三日（祭日）午前十時

於 記念館大講堂

挙式

祝宴、余興（独唱、舞踊、レヴュー、映画「若人明治」
等）

四、記念大講演会 四日（水曜）午後一時

於 記念館大講堂（公開）

イ、講演者

金子堅太郎、土方久徴、牧野菊之助ノ三氏
五、新艇進水式及競漕会 同日（水曜）午後一時

於 向島帝大艇庫

（中略）

六、父兄保証人招待会 五日（木曜）午後零時半

於 記念館大講堂

各種余興第一日二準ズ

七、記念運動競技会 同日（木曜）

イ、柔道試合 於 体育館

（中略）

ロ、剣道試合 於 体育館

（中略）

ハ、相撲大会 於 体育館

ニ、水泳大会 於 体育館プール

（中略）

ホ、拳闘試合 於 体育館

（中略）

ヘ、籠球試合 於 体育館

（中略）

八、附近居住者招待会 同日（木曜）午後六時半

於 記念館大講堂

各種余興第一日二準ズ

九、野球試合 六日（金曜）正午ヨリ

於 和泉運動場

中京商業対本学予科チーム、各大学ピックアップチーム対
本学選手

十、記念運動競技会 七日（土曜）午前十時ヨリ

イ、陸上競技大会 於 和泉本学運動場

（中略）

ロ、弓術試合 於 和泉本学道場

（中略）

ハ、庭球試合 於 和泉本学コート

（中略）

ニ、ラグビー蹴球試合 於 和泉本学運動場

（中略）

ホ、ア式蹴球試合 於 和泉本学運動場

（中略）

ヘ、ホッケー試合 於 和泉本学運動場

（中略）

十一、慰霊祭 八日（日曜）午後一時

於 記念館大講堂

物故セル創立者、功勞者、教職員其他ノ追悼式

十二、展覧会 自二日至六日 毎日午前十時ヨリ午後四時迄

於 本館三階（公開）

イ、明治大学歴史資料ノ陳列

ロ、刑事博物館所蔵資料ノ陳列

ハ、学友会スキー部、馬術部、山岳部、射撃部連合ノ参考

品陳列

十三、学生主催各種飾付及催シ 於 予科教室（公開）

十四、航空部

十五、記念出版物

記念論文集、明治大学五十年史ヲ発行シ來賓其他ニ配布

ス

十六、明大グラフィック発行

記念グラフィック発行シ全国ニ頒布ス

十七、映画ノ作製

本大学ノ内容概観、学生ノ勉学、運動等ヲ実写セル記念



3代目記念館（1931年）

十八、映画ヲ作製シ記念式第一日ニ観覧ニ供ス
自動車班

二日自動車五台ヲ裝飾シ明治神宮ニ参拝母校ノ隆昌ヲ祈願シタル後市内要所ヲ一巡、四日ハ市内中等学校ヲ訪問ス

十九、地方講演

廿、西日本縦断自動車班

廿一、図書館建設

（中略）

因二五日、六日、七日和泉明大運動場行京王電車ハ新宿、代田橋間往復金十六銭ヲ同日ニ限り半額金八銭ニ割引スル由

（『明治大学百年史』第二巻、三二〇～三二三頁）

事業としては、まず「地方講演」が、一九三二年三月から八月にかけて全国各地で先行実施された。

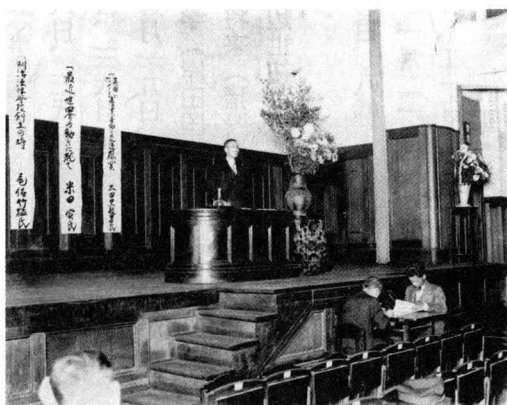
続いて、記念式典が、一月一日（日）に三代目記念館講堂において催された。この三代目記念館は、一九九五年の取り壊しまで駿河台キャンパスのシンボル校舎であり、以後の六〇周年、七〇周年、八〇周年事業の際も、記念式典の会場となった。

式典には首相、文相、法相をはじめ多くの来賓を招き、余興や記念映画の上映会も実施された。

翌二日には、尾佐竹猛、米田實、太田黒敏男により、四日には来賓により講演会が開催されている。三日以降になると父兄・保証人や近隣住民の招待会、サークルによるスポーツ等のイベントが開催されている。他に記念論文集や『明大グラフ』の出版といった学術的な事業が実施されている。三〇周年時と比べ周年事業に関わるサークルも増え、さまざまなイベントが行われていることが読み取れる。

大学史関係の事業としては、『明治大学五十年史』^①の編纂と展覧会の開催が挙げられる。ただし展覧会は大学史関係の「明治大学歴史資料ノ陳列」^②だけではなく、「刑事博物館所蔵資料ノ陳列」も開催された。周年事業に際して展覧会がおこなわれたのは初めてである。

なお、一九三四（昭和九）年より、記念式典が催された十一月一日を「創立記念祝日」として休日とした。これは、五〇周年記念という以外に、同事業に対して昭和天皇から下賜金を受けたことを記念しての措置であった。明治大学には、すでに創立二〇周年をきつか



「記念大講演会」（1931年11月2日）

けに制定された「創立記念日」が存在するが、あわせて「創立記念祝日」という休日が設けられたのである。両記念日とも現在にまで受け継がれている。

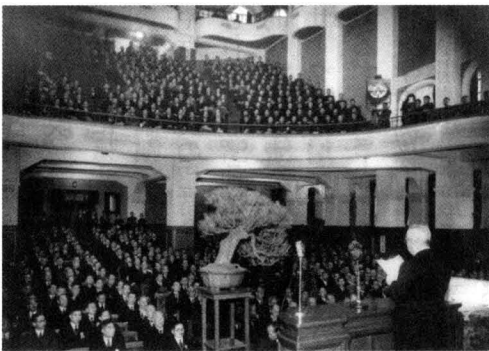
(4) 六〇周年

ここでは、創立六〇周年記念事業について、筆者がまとめた【第1表】を参照しながら見てゆきたい。事業は、一九四〇（昭和一九）年一月一八日から二二日の会期で開催された。

まず事業内容全般にわたり、戦争の時代という社会状況を反映していたことが特徴であることを指摘しなければならない。その最も象徴的な事例が開催年である。明治大学の創立年は一八八一年であり、以後も一九〇一年に創立二〇周年、一九二一年に創立三〇周年、一九三一年に創立五〇周年事業を開催したことは、すでに述べたとおりである。したがって、本来の創立六〇周年は一九四一（昭和一九）年であったが、一九四〇年が皇紀二六〇〇年（紀元二千六百年）という国家的行事にあたることから、これにあわせて開催されたのである。



創立60周年記念式典当日の3代目記念館（1940年11月18日）



創立60周年記念式典

【第1表】創立60周年 記念事業一覧

- 1 記念式典（二月一八日、三代目記念館講堂）
- 2 慰霊会（二月一八日、三代目記念館講堂）
- 3 記念学術講演会（二月一九日、三代目記念館講堂）
 - （1）新しい政治と文学（岸田国士）
 - （2）新体制と私法の将来（猪股淇清）
 - （3）皇室と国民（渡辺世祐）
- 4 記念論文集の刊行
- 5 体育大会（二月二〇日、八幡山グラウンド）
- 6 ボートレース大会（二月二二日、向島商大艇庫）
- 7 展覧会（二月一八日～二二日、図書館）
- 8 『明治大学六十年史』編纂

（『明治大学百年史』をもとに筆者作成）

記念式典は、二月一八日（月）に三代目記念館講堂で開催された。役職者の式辞には「今や未曾有の国難に当面して新体制の時代に入り本学は此時代の要求に順応し卒業後直に新体制の指導者たり得べき大学生の養成」や、「今や凡ての点において国家の大学教育であります」という文言が見られる。当時の社会状況を反映しているといっ

ていいだろう。

このことは、講演会のテーマや内容⁽¹⁶⁾、慰霊祭の祭文に「物故セル
本学創立関係者功労者及び教職員各位並びに本学関係出征将兵戦病
没者各位ノ霊ニ告グ⁽¹⁷⁾」と初めて明治大学出身の軍関係者に対する文
言が加えられたこと、あるいはスポーツ関係のイベントの趣旨⁽¹⁸⁾に至
るまで、同様に見て取ることができる。

大学史関係の事業としては、『明治大学六十年史』⁽¹⁹⁾の編纂と、「近
世文化展覧会」⁽²⁰⁾と題した展覧会がおこなわれた。

（5）七〇周年

ここでは、創立七〇周年記念事業について、「史料3」を参照し
ながら見てゆきたい。事業は、一九五〇（昭和二五）年十一月一七
日から一九日の会期で開催された。事業は、同年の「明大祭」と銘
打った学園祭とあわせて開催された。学園祭との共催は初めての試
みである。

〔史料3〕『明治大学新聞』（一九五〇年十一月一日）

記念祭盛大に開く

歴史的祝典を挙行

天皇陛下御臨席のもと

創立七十周年をむかえた本学記念式典は、恒例の大学祭と共に
十七、八、九日の三日間に、明大祭と銘うつて行われるが、この
記念式典は十七日天皇陛下の御臨席を仰ぎ本学総長鶴沢祝典委
員長の下に盛大に挙行される。

十七日の式典には衆参両院議長、天野文相及び全閣僚の参列を

仰ぎ、更に学界代表として南原東大総長、島田早大総長の臨席
祝辞があり、表彰式典、校友代表天野敬一氏学生代表天野孔君
（政大三）祝辞など記念式典の挙行と共に三日間にわたる多彩
な大学祭を中心として、七十周年を迎える明治大学史の輝かし
い一頁が展開される。

第一日

（中略）

記念式典につづいて午後から図書館三階自習室において、物故
された本学創立者、功労者、関係物故者の慰霊祭を、各遺族は
じめ総長伊藤慰霊祭委員長ら関係者によつて行われ、さらに午
後一時から記念館講堂において鶴沢総長、マ元帥金融経済顧問
ドッジ博士の講演つづいて
三時より歌舞伎研究部の手
による歌舞伎が夕刻まで行
われる。一方屋外では校内
対抗の駅伝競走がある。

第二日

十八日は十時より記念館で
行われる模擬裁判を皮切りに、各研究部主催の催しも
のが行われるが、この日十
時ごろ、三笠宮殿下御来校
本館三十八教室で開かれる
考古学展の見学をされる、
一方体育館では運動模範試



創立70周年記念式典（1950年11月17日）

合が展開される。

第三日

最終日の十九日は、前日と同様十時から記念館講堂で各研究部の催しものが夜八時まで行われるが、この日和泉球場では午前九時から記念野球大会が挙行される。

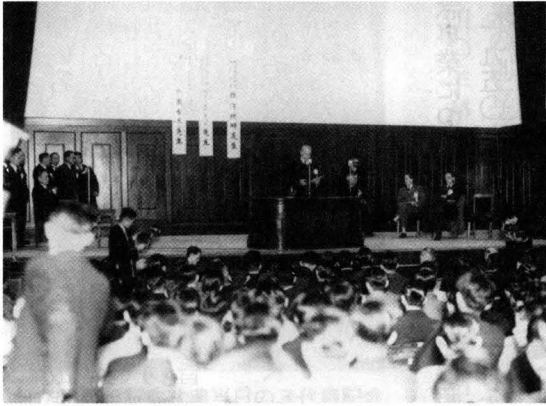
『明治大学百年史』第二巻、一〇四六―一〇四七頁

記念式典は、一月一七日（金）に、三代目記念館講堂で催された。注目すべき点は、昭和天皇のご臨席をえたことであろう。さらに同日、慰霊祭とGHQの経済政策で重要な役割を担っていたドッジによる記念講演がおこなわれた。

他には、各種展覧会（明

治大学史展、考古学展、法学部展、農学部展、体育展、文化部連合展、工学部展、政経学部展、商学部展、放送展、地理展、高校・中学展）、各サークルイベント、スポーツイベントがおこなわれた。これらは、一部を除けば学園祭イベントとしての性格が強いものである。

また、七〇周年事業は、大学の制度・施設面との関



創立70周年記念講演



創立80周年（1960年）

連でいえば大学院設置とリンクされた。大学院は一九五二（昭和二七）年度から開設され、大学院校舎は一九五三（昭和二八）年一二月に竣工している。周年事業において、大学院設置のような教育研究面の拡充が実現したのは今回が初めてである。

（6）八〇周年

ここでは、創立八〇周年記念事業について、筆者がまとめた【第2表】を参照しながら見てゆきたい。事業は、一九六〇（昭和三五）年一月一日から五日までの会期で開催された。記念式典をはじめとした諸イベントは、前回七〇周年事業と同様に学園祭と合わせて開催された。

【第2表】 創立80周年 記念事業一覽

- 1 記念式典
 - （1）記念式典
 - （2）慰霊祭
 - （3）創立者・功労者墓参
 - （4）記念大学祭
 - （5）記念体育祭
- 2 募金活動
- 3 記念映画の制作
- 4 学術調査
 - （1）アラスカ学術調査
 - （2）国内学術調査（鉄鋼

産業における産業革新にともなう労働階級の実態

5 記念1号館の建設

6 奨学金制度の充実

（『明治大学百年史』をもとに筆者作成）

そもそも、創立八〇周年記念事業の内容については、一九五八（昭和二三）年八月一日付で設置された「八〇周年記念事業計画準備委員会」内で検討されていた。同委員会は、記念式典、講演会、年史編纂、校舎新築といった、これまでの周年事業でも開催されていた事業のみならず、長期にわたる海外学術調査、奨学金制度創設等のこれまでの周年事業には見られない事業方針も打ち出した。この方向性は基本的に実現したが、年史編纂や一部校舎の新築は構想どおりに進まなかった。

記念式典は、一九六〇年十一月一日（火）に、三代目記念館講堂で催された。役職者の挨拶が続いて、私大連合長、東大総長、校友代表（三木武夫）が祝辞を述べた。同日午後には慰霊祭が執り行われ、創立者をはじめとした功労者とともに、



創立80周年記念式典（1960年11月1日）

戦没者の霊に対しても母校の発展を報告した。

また会期中には、「アラスカ展」（ただし、会期外も含む⁽²¹⁾）や、記録映画「マッキンレー征服」上映会がおこなわれた。これは、これまでの周年事業における学術事業と比較して長期間にわたったアラスカ学術調査の成果報告の性格も持っていた。同調査は、考古学・地理学・民族学の教員を中心に「総合的⁽²²⁾」に実施されており、八〇周年記念事業の「目玉⁽²³⁾」とも評されている。調査の詳細については、刊行物として出版された『アラスカ⁽²⁴⁾』を参照してほしい。

記念学園祭としておこなわれたイベントは「記念大学祭プログラム⁽²⁵⁾」に掲載されている。内容は質・量ともに充実しており、映画上映、音楽、演劇、講演会などがおこなわれている。なお、学園祭のテーマは「自由と平和を愛し、民主主義を擁護し、学問文化発展のために」であった。

施設面の整備としては、駿河台キャンパスに八〇周年記念一号館が整備された（一九六一年竣工）。ただし、計画のあった記念二号館は、資金面の問題から整備を断念し、一〇〇周年事業へと引き継いでいる。また、学部設置等の教育研究面の拡充はおこなわれていない。

他に、会期外のイベントとして、記念体育祭（於、国立競技場）、創立者・功労者墓参がおこなわれている。大学史関係の事業は、年史編纂が断念され、講演会や展覧会もおこなわれなかった。ただし、年史編纂については、施設と同様一〇〇周年事業へと引き継いでいる。

(7) 一〇〇周年

ここでは、創立一〇〇周年記念事業について、筆者がまとめた【第3表】を参照しながら見てゆきたい。

さて、事業推進の本格的第一歩となる「明治大学創立一〇〇周年記念事業推進要綱」²⁶は、早くも一九七一（昭和四六）年に制定された。充分な準備期間を確保し、充分な検討の後に大規模に開催されたのが一〇〇周年事業の特徴といえるだろう。

【第3表】創立100周年 記念事業一覧

1 記念式典

(1) 記念式典

(2) 記念祝賀会

(3) 大学関係物故者慰霊祭

(4) 創立者墓参

(5) 教職員への感謝の会

(6) 記念碑設置（大学会館一階、三木武夫揮毫）

(7) 記念植樹

2 募金活動

3 記念講演会（全国九都市）

4 記念映画の制作（響け暁の鐘）

5 校友名簿の作成

6 大学会館の建設（一九八五年竣工）

7 記念図書館の建設（一九八四年図書館・研究棟竣工）

8 学術調査

(1) 戦後日本の経済および法構造の展開過程に関する研

究

(2) アジア諸国における人権及び法律制度の比較研究

(3) 環太平洋圏諸国の政治と社会に関する比較研究

9 学術叢書の出版（全七巻、建学者の精神と足跡）

10 歴史編纂（『明治大学百年史』編纂）

11 国際交流基金の設定

（『明治大学百年史』をもとに筆者作成）

記念式典は、一九八〇（昭和五五）年一月四日（火）に、日本武道館で催された。式典会場が学外となつたのはこれが初めてである。同日に記念祝賀会がおこなわれているが、大学関係物故者慰霊

祭（一〇月一八日）、創立者

墓参（一〇月二五日）、教職

員への感謝の会（一月八日）

は、それぞれ式典の前後におこなわれている。

記念講演会は、式典講演会、

記念講演会、小講演会に分類

され実施された。式典講演会

は、五月二六日に元米国駐日

大使でハーバード大学教授の

ライシャワート、元首相で校

友の三木武夫を講師に迎え、

帝国ホテルで開催された。記

念講演会は、一九七九（昭和



創立100周年記念式典（1980年11月4日）

五四）年から一九八〇年にかけて、学内外の講師により全国九都市で開催された。訪問地の数は八〇周年時のアラスカ展を上回っている。小講演会は、在校生父兄をおもな対象として、一九七八（昭和五三）年度の父兄懇談会とともに一四県で開催された。なお、式典講演会と記念講演会の講演録は、『明治大学創立一〇〇周年記念講演集』²⁷として刊行されている。

記念事業として、記念映画の製作、校友名簿の作成、国際交流基金の設定（後述）、学術調査の実施、学術叢書の刊行、そして大学史関係事業として『明治大学百年史』編纂が進められた。記念映画は「響け暁の鐘」と題され、諸記念イベントで上映された。学術調査は、総勢三三名の研究者により、「戦後日本の経済および法構造の展開過程に関する研究」、

「アジア諸国における人権及び法律制度の比較研究」、「太平洋圏諸国の政治と社会に関する比較研究」の三テーマで進められた。その成果は『学術調査研究報告書』²⁸として刊行されている。学術叢書としては、「建学者の精神と足跡」²⁹をテーマとして、岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操の三人の創立者と鶴沢総明の著作の一部を、全七巻で復刻・刊行している。³⁰



式典講演会（1980年5月26日）

最後に大学の教育研究・施設面について見ると、施設面では大学会館（一九八五年竣工）と記念図書館（一九八四年竣工）が整備された。また、学部設置等はおこなわれていないが、すでに述べた国際交流基金の設定は教育研究面の拡充と捉えていいだろう。事実、基金の設定を契機として明治大学の国際交流は本格化したと評価されている。

（8）一二〇周年

前半部の最後として、創立一二〇周年記念事業について、「史料4」を参照しながら見てゆきたい。事業は二〇〇〇（平成一二）年七月発足の「創立一二〇周年記念行事準備プロジェクト」で検討され、二〇〇一年三月設置の「明治大学創立一二〇周年記念事業委員会」において企画された。同委員会には、「式典・祝賀会」、「功労者選考・VI表彰」、「記念フォーラム」、「記念展示」、「創立者顕彰講演会」、「広報」、「文化講演」の分科会が置かれ、それぞれの担当事業の準備、実施にあたった。

また、創立一二〇周年と併記する形で「創立者生誕一五〇年」が強調されたが、創立者の精神や思想を検討、顕彰する中心となったのは、当時の大学史担当セクションであった大学史料委員会と歴史編纂事務室であった（詳細は後述）。

〔史料4〕創立一二〇周年記念事業一覧

- 1 知的資産センター（TLO）開設記念シンポジウム
「21世紀における大学の役割—大学の知的資産開放と新しい産官学連携のあり方—」

- 2 明治大学・ウィーン大学共同シンポジウム
「19世紀における日常と遊びの世界―江戸・東京とウィーン―」
- 3 新中央図書館開館記念式典
- 4 リバティ・アカデミー記念公開講座
「日本の近代と明治大学」
- 5 体育会山岳部・炉辺会ヒマラヤ登山
創立者顕彰講演会
- 6 (1)「商法教育の先駆者 岸本辰雄」
(於 鳥取県鳥取市)
- (2)「宮城浩蔵―その東京時代と山形―」
(於 山形県天童市)
- (3)「法学者・教育者としての矢代操」
(於 福井県鯖江市)
- 7 全国校友大会記念講演(於 石川県金沢市)
「日本海地域の風土と人間―創立者たちの思想とかわつて―」
- 8 記念展示(於 石川県金沢市)
「アトラス・ヌーボー(17世紀の世界地図) 里帰りと尾佐竹猛著作展」
- 9 創立者墓参と明治大学発祥の地記念碑巡り
- 10 記念ホームカミングデー
- 11 創立者胸像除幕式
- 12 記念フォーラム
「21世紀の日本と明治大学―『個』を強くする大学像の探求―」

- 13 創立120周年・創立者生誕150年記念式典・祝賀会
 - 14 記念展示「建学の精神とその歴史」
 - 15 法学部創立120周年記念式典・シンポジウム
 - 16 記念文化講演会とブックフェア(明治大学・三省堂書店共同企画)
 - 17 「大学と本の街 神田駿河台―ともに歩んで120年―」
政治経済学部「地域行政学科」開設記念シンポジウム
 - 18 「地域の創造と人の輪―コミュニティ・企業・行政―」
駿河台B地区建物(現アカデミーコモン)起工式
 - 19 経営学部「公共経営学科」開設記念シンポジウム
「NPO(民間非営利組織)の使命と戦略的マネジメント」
 - 20 創立120周年記念事業募金第3期「寄付者銘版」作成
(『建学の理念の検証と顕彰・再創造』、一―二頁)
- 記念式典(「創立120周年・創立者生誕150年記念式典・祝賀会」)は、二〇〇一(平成一三)年十一月一日(木)に、帝国ホテルで催された。文部大臣、社団法人日本私立大学連盟会長・早稲田大学総長、財団法人大学基準協会会長・京都橘女子大学学長、日本私立学校振興・共済事業団理事長、明治大学顧問で元首相の村山富一らが来賓として参列した。
- 記念事業として、多くの学術・スポーツのイベントがおこなわれたが、これまでの周年事業と比較して顕著な特徴は、大学の施設・教育研究の両面の充実が図られた点であろう。
- 施設面では、駿河台キャンパスの大規模再開発(リバティタワー(一九九八年竣工)・アカデミーコモン(二〇〇四年竣工)等)が

進められた。二〇〇一年に限定すれば、リバティタワー内に竣工した記念図書館の開館記念式典、およびアカデミーコモン（「駿河台B地区建物」）の起工式がおこなわれている。

教育研究の面では、直接的には、知的資産センター、政治経済学部地域行政学科、経営学部公共経営学科の開設が該当するだろう。しかし、筆者はホームカミングデーの開催やリバティ・アカデミーの開講も同様に考えたい。

ホームカミングデーとは、それまでの明治大学にはなかった大規模な同窓会で、一九九八（平成一〇）年のリバティタワー竣工を契機として毎年開催されるようになったイベントである。現在では、卒業生と大学の、あるいは卒業生同士の交流の場として定着している。リバティ・アカデミーとは、一九九九（平成一一）年に社会貢献を旨指して開講された一般向けの生涯学習講座である。現在では、明治大学における産学連携・地域連携拠点のひとつとなっている。

これらの学科開設、あるいは記念ホームカミングデーやリバティ・アカデミー記念講座の実施は、将来を見据えた大学改革の一環として捉えることができるだろうか。つまり、学科の増設は、教育の多様化、



駿河台キャンパス（2004年）

あるいは社会が要請する教育への対応として、卒業生との連携強化や社会貢献は、これからの大学に求められる重要な役割として、である。明治大学では二〇〇一年以降、情報コミュニケーション学部（二〇〇四年）や国際日本学部（二〇〇八年）の新設や、文学部心理社会学科（二〇〇二年）等の学科増設、法科大学院（二〇〇四年）、専門職大学院（二〇〇四年）、教養デザイン研究科（二〇〇八年）等の大学院新設、あるいは大学間協定、産学連携・地域連携が急速に進められているが、これらは周年事業とはリンクしなかったものの二〇〇周年事業を契機とした出来事として捉えられるだろう。その意味で、いまだその改革の渦中にあるため評価をすることは難しいが、二二〇周年記念事業は、二二世紀を迎え明治大学が進むべき方向性を学内外に示すきっかけとなったのではないだろうか。

二 大学史担当セクションの役割

（一）二〇周年・三〇周年

前半部でのべたとおり、創立二〇周年、三〇周年における大学史関係の事業は年史編纂のみであった。それも、複数の研究者が集って編纂したものではなく、『明治法律学校二十年史』、三〇年史である『明治大学史』ともに田能村梅士が個人で執筆したものである（『明治大学史』は『明治法律学校二十年史』の増補版）。

著者の田能村は、一八八九（明治二二）年七月に明治法律学校を卒業した。読売新聞記者として当時の著名ジャーナリストのひとりであった。遅くとも一八九九年には明治法律学校から給与を得ており、明治法律学校内に設置された講法会や出版会でも活躍している。³²なお、創立三〇周年時に企画された校歌募集の審査員も務めている。

(2) 五〇周年

創立五〇周年における大学史関係の事業は、年史編集（『明治大学五十年史』）、講演会、展覧会であった。ここでは、特に講演会（『記念大講演会』）と展覧会（『明治大学歴史資料ノ陳列』）について述べてゆきたいが、これらを中心となつて担つたのが明治大学出身の大審院判事で、この年（一九三一年）から法学部教授に就任していた尾佐竹猛であった。

まず、講演が大学史関係であることは、テーマが「明治法律学校創立の時」であつたことから明らかとなる（写真「記念大講演会」も参照）。残念ながら講演録は遺されていない。

また、展覧会の開催にあたつては、周年事業を準備・実行する組織内に「展覧会部」が設けられ、その部長に尾佐竹が、副部長に藤沢衛彦（専門部教員）らが就任、また事務職員から伊藤省吾（学生課長）が参加していることを指摘しなければならない。たしかに、「展覧会部」は周年事業に際した有期の組織ではあるが、筆者は明治大学に初めて設置された大学史担当セクションとして評価したい。なお、本稿は尾佐竹について詳述する場ではないが、明治大学史資料センターで共同研究の対象として取り上げた人物であることを付記しておきたい。その成果は、『尾佐竹猛研究』、『尾佐竹猛著作集』として発表している。

(3) 六〇周年

創立六〇周年における大学史関係の事業は、『明治大学六十年史』の編纂と「近世文化展覧会」と題する展覧会の開催であつた。

「近世文化展覧会」は、「紀元二千六百年奉祝本学創立六十周年記

念 祝典関係書類綴」によると、「展覧会部」で準備・実行されたようである。「展覧会部」の人事は、綴られている文書の全てに月日記載があるわけではないので推測になつてしまふが、文書が綴られた順番から考えて、当初は猪股淇清が部長を務めていた（もしくは構想されていた）が、結局は尾佐竹猛が部長に落ち着いていることが想像される。鈴木秀幸はこの展覧会について、当時の社会状況や展示資料から「今まで以上に国家を強く意識したものではなかったか」と評価している。

(4) 七〇周年

創立七〇周年における大学史関係の事業は展覧会のみであつた。展示の内容については不明であるが、「大学の年代別に依る沿革を公開」する目的で開催されたことは間違いない。

また、「明治大学創立七十周年記念祝典委員名簿」によれば、「展覧会部」というセクションが設置され、すでに尾佐竹猛は他界していたが藤沢衛彦は委員を務めていた。なお、部長は鈴木堅次郎であつた。ただし、前半部で述べたように、七〇周年時に開催された展覧会は大学史関係のみではない。例えば、「学校側が特に力こぶをいれたといわれる」考古学展は、三笠宮殿下がご来場されたこともあつて「明大考古学の名を高からしめた」と評されている。

いづれにしても、創立五〇周年記念事業以来、尾佐竹猛を中心として大学史関係の事業、あるいは大学史担当セクションは一定の実績をあげたと考えていいだろう。しかし、大学史担当セクションを常置すべきであるというような発想は現れなかった。その意味では、大学史関係の事業は、周年事業等のイベント時の催し物のひとつに

過ぎないと見なされていたようである。

（5）八〇周年

前半部で述べたとおり、創立八〇周年事業では、校舎新築のように全てが実現しなかったものもいくつかあった。年史編纂事業も、そのひとつであった。検討はされたものの、準備期間の不足等の理由により実現しなかったのである。また、創立五〇周年記念事業以来開催されてきた大学史関係の展覧会、あるいは講演会もおこなわれなかった。

ただし、年史編纂については、ただ断念したわけではなかった。来る一〇〇周年時に本格的な年史編纂をおこなうこととしたのである。その準備として、一九六二（昭和三七）年に法人事務組織内に歴史編纂資料室が設置された。同資料室は、例えば基礎的な史料の収集、資料集（一九六七年から）や研究紀要（一九八一年から）の刊行といった業務をおこなうことで、一〇〇年史編纂事業に備えた。そして、同資料室設置以降は大学史担当セクションが常置される時代となっている。

たしかに八〇年史編纂計画は未完であったが、中長期的に見れば常置の大学史担当セクションが設置されたことには大きな意義があったと言えるだろう。

（6）一〇〇周年

いま述べてきたように、一〇〇年史編纂事業は八〇周年事業から引き継がれた課題であった。これを本格的に進めるべく、一九七八（昭和五三）年に、年史編纂にあたる専門の教員を中心として「歴

史編纂専門委員会」が設置された。歴史編纂資料室も一九八七（昭和六二）年に歴史編纂事務室に発展的に改組された⁴⁴。

その成果である『明治大学百年史』第一巻が刊行されたのは一九八六（昭和六一）年、最終巻となる第四巻が刊行されたのは一九九四（平成六）年であった。この『明治大学百年史』は、質量ともに、これまでの年史を凌駕する内容を持ち、現在のところ明治大学史の決定版とも言える。

また、一方で一九八〇年の一〇〇周年記念式典前後には、創立八〇周年時と同様、大学史関係の講演会、展覧会は開催されなかった。これは、鈴木秀幸が「研究・編集・展示はひとつのサイクル、あるいは三位一体のものと思われるが、基礎ともいべき調査・研究に多年を要し、さらに『明治大学百年史』の編纂に精力が⁴⁵ぎ込まれていた」と述べていることから事情がうかがえる。つまり、基礎となる調査・研究ののち年史が編纂され、その成果として本格的な展覧会が開催されるべきであるという理解が、当時の大学史担当セクションにあったためだと思われる。事実、展覧会が実現したのは、『明治大学百年史』第四巻の刊行を翌年に控えた一九九三年であった。「明治大学の歴史展」と題した展覧会は、一〇月五日（火）から九日（土）の会期で駿河台キャンパス大学会館内の会議室を会場に開催されている。

以上から、たしかに『明治大学百年史』と「明治大学の歴史展」は、周年事業の中心である一九八〇年から大きく遅れて刊行、開催された。しかし、【第3表】で明らかのように、『明治大学百年史』編纂は一〇〇周年記念事業の一環として位置づけられていた。その意味で、大学史担当セクションの一〇〇周年事業への関わりとして、

『明治大学百年史』編纂と「明治大学の歴史展」を挙げることは間違いない。

(7) 一二〇周年

最後に、創立一二〇周年事業における大学史関係の事業と、大学史担当セクションの役割について述べておきたい。同事業においては、大学史料委員を務めていた教員が「記念展示」、「創立者顕彰講演会」、「文化講演」の各分科会に委員として参加した。特に、「記念展示」と「創立者顕彰講演会」の各分科会委員は、大学史の専門的知識が求められる役割と考えていいだろう。また、歴史編纂事務室は「記念展示」分科会の事務局を担当し、展覧会に伴う諸準備の実務を担当した。以下で、具体的内容について確認したい。

「創立者顕彰講演会」は、創立者の郷里ごとに開催した。講師や司会には、おもに大学史料委員があたった。

記念誌は、体裁としては『大学史紀要』の一号として編集された。内容は、前記の「創立者顕彰講演会」と、二〇〇一年全国校友大会でおこなわれた「創立一二〇周年記念講演」の講演録となっている。後者は「日本海の風土と人間―創立者達の思想とかかわって」と題して、やはり大学史料委員によって講演された。なお、二〇〇一年全国校友大会では、開催地が尾佐竹猛の郷里ということもあり、彼に関する展覧会もおこなわれた。したがって、この記念誌は創立者の思想や学問、あるいは建学の精神について検討された特集号であつて年史ではない。

「記念展示」は、二〇〇一年一月一日から七日まで、一二〇周年記念館としてすでに竣工していたリビティタワーの最上階で開催

された。テーマは「建学の精神とその歴史」であった。

以上の「創立者顕彰講演会」、その講演録としての記念誌の発行、そして「記念展示」は成功裏に終わった。筆者は、その要因を『明治大学百年史』編纂を契機として常置されていた大学史担当セクションの活動の蓄積があつたからだと考えている。

なお、創立一二〇周年記念事業から二年後の二〇〇三年、大学史料委員会と歴史編纂事務室は改組され、明治大学史資料センターと、同センター事務室が開設されている。

おわりに

いまさら述べるまでもなく、各大学には多種多様な特色がある。公立・私立の違いはもちろんであるが、創立（設置）した個人や団体、設立時期、設立趣旨、学校の場合、経営方針、カリキュラムなど、大学を特色づける要因も千差万別である。そのなかで、大学の歴史や伝統から特色やアイデンティティを見出すことは、多くの大学でおこなわれる方法であろう。

本稿では、明治大学における周年事業について概観してきた。そのうち、大学史関係の事業については、創立一二〇周年時に年史編纂がおこなわれたのを嚆矢として、以後も年史編纂、講演会、展覧会などがおこなわれてきたこと、これらを担うべく、学内法制上の位置づけ・性格は一樣ではないものの、何かしらの大学史担当セクションが設置されてきたことを明らかにできた。

その際、大学史関係の事業や大学史担当セクションは、たしかに常に右肩上がりではないものの、大局的には周年事業を重ねることに大きくなっていったことを明らかにできたと思う。つまり創立

第4表 明治大学周年事業一覧

	年	式典			校舎整備	特筆事項	大学史		
		開催日	会場	同時イベント			セクション	年史	展示
20周年	1901	7/6(土)	南甲賀町校舎第1講堂	卒業式		翌年から1/17を創立記念日(休日)とした	個人	○	/
30周年	1911	10/14(土)	初代記念館講堂	/	初代記念館	校歌(とよさか昇る)制定	個人	○	/
50周年	1931	11/1(日)	3代目記念館講堂	/	図書館	1934年から11/1を創立記念祝日(休日)とした	有期組織	○	○
60周年	1940	11/18(月)	3代目記念館講堂	/		開催を皇紀2600年に合わせた	有期組織	○	○
70周年	1950	11/17(金)	3代目記念館講堂	学園祭	大学院	昭和天皇ご臨席	有期組織	/	○
80周年	1960	11/1(火)	3代目記念館講堂	学園祭	1号館	アラスカ等学術調査大学史担当セクション常置の契機	有期組織	/	/
100周年	1980	11/4(火)	日本武道館	/	図書館、大学会館	『明治大学百年史』編纂	常置組織	○	○
120周年	2001	11/1(木)	帝国ホテル	/	リパティタワー等	創立者顕彰	常置組織	/	○

(注) 校舎整備欄は当時の呼称

(注) 斜線部は該当なし

第5表 明治大学における大学史担当セクションの変遷（常置以降）

年	セクション名	事務局	備考
1962	/	広報課歴史編纂資料室	
1978	歴史編纂専門委員会	↓	
1985	百年史編纂委員会	↓	1980年創立100周年
1986	↓	総務部歴史編纂事務室	1994年『明治大学百年史』完結
1995	大学史料委員会	↓	2001年創立120周年
2003	明治大学史資料センター	総務部大学史資料センター事務室	
2007	↓	総務部企画総務課大学史資料センターグループ	
2009	↓	総務部総務課	

二〇周年、三〇周年時における大学史関係事業は、個人の執筆による年史編纂のみであったが、創立五〇周年、六〇周年、七〇周年時には、周年事業を準備・実行する組織内に有期のセクションが設置されていた。そのメンバーには、尾佐竹猛や藤沢衛彦らが名前を連ねていた。尾佐竹等の他界によって、一時期大学史担当セクションの活動は停滞したが、創立八〇周年時の年史編纂の断念と『明治大学百年史』編纂計画により、一九六二年からは大学史担当セクションが常置される時代となり、今日に至っているのである（【第4表】【第5表】参照）。

もちろん、鈴木秀幸がたびたび指摘しているように、常置の大学史担当セクションにも廃止の危機はあった。それでも、明治大学においては、周年事業を梃子に大学史担当セクションは拡大してきたと言えそうである。このことを換言すれば、明治大学において「大学史」への需要が増加してきたことの裏づけと言えるだろう。

筆者は、現在の明治大学史資料センターを、質的・量的に見て明治大学史上最も安定的に運営されている大学史担当セクションと考えている。それだけに、近年では大学アーカイヴズへの対応をはじめとして、業務内容は多岐に渡っている。しかし筆者は、再来年度に迫った創立一三〇周年記念事業に際して、明治大学史資料センターは主体的、積極的にこれに参画してゆくべきであると考えている。本稿で述べてきた歴史的経緯に加え、周年事業は大学史担当セクションにとって自らの存在意義や存在感を発揮できる場となるからである。

もちろん、大学史担当セクションが担う業務内容や役割については各大学で異なっている。本誌では他大学の事例も紹介されること

になっている。本誌の試みが、周年事業への大学史担当セクションの関わり方についての議論を深めるきっかけとなれば幸いである。

【参考文献】

- 明治大学『明治大学百年史』第一巻、明治大学、一九八六年
- 明治大学『明治大学百年史』第二巻、明治大学、一九八八年
- 明治大学『明治大学百年史』第三巻、明治大学、一九九二年
- 明治大学『明治大学百年史』第四巻、明治大学、一九九四年
- 明治大学歴史編纂事務室『歴史編纂事務室報告』第二三集、二〇〇二年
- 明治大学広報部『建学の理念の検証と顕彰・再創造―創立120周年記念事業記録集―』、二〇〇二年

【注】

- (1) 一二〇周年記念式典を控えていた二〇〇一年から翌年初めにかけて、大学史料委員によりそれ以前の周年事業についての検討が、『記念式典』物語」と題して四回にわたりおこなわれている。対象とされたのは三〇、五〇、八〇、一〇〇周年の各事業であった。執筆者と掲載誌は下記のとおり。後藤総一郎「創立三〇周年記念式典」(明治大学広報部発行『明治』第一〇号、二〇〇一年)、渡辺隆喜「創立五〇周年記念式典」(『明治』第一一号、二〇〇一年)、別府昭郎「創立八〇周年記念式典」(『明治』第二二号、二〇〇一年)、吉田悦志「創立百周年記念式典」(『明治』一三三号、二〇〇二年)。
- (2) 『明治法律学校二十年史』田能村梅土著、講法会、一九〇一年。
- (3) 『明治法学』第二号(明治法学会出版、一九〇一年七月)、四一―四五頁。
- (4) 明治大学史資料センターでは、二〇〇六年度から「明治大学人権派弁護士研究会」を組織し、関係資料の調査や研究を進めている。その成果の一部は、『大学史紀要』第二二号(二〇〇八年)および同一三号(二〇〇九年)で発表して

第6表 高等文官試験・判事検事登用試験・弁護士試験合格者数一覧

年次	文官	判 検 事		弁 護 士	
	明 治	総 数	明 治	総 数	明 治
	(人)	(人)	(人) (%)	(人)	(人) (%)
明治22年				51	22 (43)
26 6月	1	36	11 (31)	59	33 (56)
10		31	5 (16)		
27	1	44	20 (45)	28	10 (36)
28	2	22	7 (32)	29	10 (45)
29	2	33	?	15	
30	1	42	17 (40)	29	10 (34)
31	3	81	?	88	
32	2	51	20 (39)	39	16 (41)
33	3	77	30 (39)	47	16 (34)
34	2	81	31 (38)	63	21 (33)
35	6	138	66 (47)	91	41 (45)
36	3	80	54 (68)	36	17 (47)
37	1	146	?	39	?
38	7	39	17 (44)	14	7 (50)
39		55	30 (55)	14	3 (21)
40	3	68	22 (32)	13	3 (23)
41	2	72	33 (46)	12	4 (33)
42		35	?	12	?
43		15	?	13	?
44		14		29	
大正元		11		38	
2		20		45	

(注) 司法省編纂『司法沿革誌』、学内機関紙より作成

26年試験は2回実施

() 内は比率

23・24・25年は不明のため削除

(5) 「高等文官試験・判事検事登用試験・弁護士試験合格者数一覧」(『明治大学百年史』第三巻、三八五頁)。

いる。

(6) 『明治法学』22、四〇頁。

(7) 「創立三〇周年記念式・西園寺公望祝辞」(『明治大学百年史』第一巻、六八三～六八四頁)。

(8) 柏木グラウンドは、「(前略) 中野の東端に位し旧甲武線柏木駅を西南に距ること僅かに二丁東西八十間南北九十間の面積(後略)」を持つ運動で、一九一〇年に購入した(『明治大学百年史』第一巻、七五七～七五八頁)。旧甲武線は現在のJR中央線で柏木駅は同東中野駅。

(9) 『明治大学史』田能村梅士著、明治大学出版部、一九一一年。

(10) 明治大学では、一九二八年四月二日(土)から二四日までの会期で「復興記念祝典」を開催している(『明治大学学報』第一三八号、一九二八年)。開催の前提には、当初予定されていた創立四五周年記念事業が、関東大震災による被害のために中止されたという経緯があった。そのため、復興という点が強調されており、その象徴がこの年に竣工した三代目記念館であった。その際、「明治教育文化展覧会」と称する、明治大学で初めての大学史関係の展覧会が開催されている。これには、後述する尾佐竹猛や藤沢衛彦が関わっており、彼らの展覧会へのかかわりは創立五〇周年、六〇周年、七〇周年と続いてゆく。

(11) 『明治大学五十年史』明治大学学報発行所、一九三一年。

(12) これは、現在の明治大学博物館刑事部門(旧刑事博物館)の草創期における展覧会である。そもそも、博物館としての事業(史料の収集等)は一九二九年にはじまっていたが、常設展示室の整備は遅れていた。なお、大谷美隆法学部教授がリーダーであったが、藤沢衛彦や尾佐竹猛も関係しており、当時は大学史担当セクションと刑事博物館のスタッフの線引きは曖昧であった。詳細は『明治大学博物館 常設展示案内ガイドブック』(明治大学博物館、二〇〇四年)、鈴木秀幸「大学史展の歩み―明治大学の場合」(歴史編纂事務室『歴史編纂事務室報告』第三集所収、二〇〇二年)、『明治大学百年史』参照。

(13) 『創立六十周年記念論文集』明治大学、一九四〇年。

(14) 「志田鉦太郎総長挨拶」(『明治大学百年史』第二巻、六二五～六二六頁)。

(15) 「式典委員長挨拶」(『明治大学百年史』第二巻、六二六～六二七頁)。

(16) 講演の内容については、「新しい政治と文学」(『明治大学百年史』第二巻、六二八～六三七頁)を参照のこと。

- (17) 「志田鉦太郎総長の記念慰霊祭祭文」(『明治大学百年史』第二巻、六二七～六二八頁)。
- (18) 「明治大学体育大会趣旨」(『明治大学百年史』第二巻、六二七～六二八頁)。
- (19) 「明治大学六十年史」明治大学、一九四〇年。
- (20) 鈴木秀幸「大学史展の歩み―明治大学の場合」(歴史編纂事務室『歴史編纂事務室報告』第三集所収、二〇〇二年) 参照。
- (21) 「アラスカ展」は、一九六〇年八月三〇日～九月四日に上野松坂屋、九月一日～二日に大阪松坂屋、一〇月一日～二六日に福岡岩田屋、十一月一日～五日(記念事業会期中)に明治大学図書館中央本館で開催された。展覧会にあわせて講演会や記録映画「マッキンリー征服」上映会なども実施されている(明治大学史資料センター所蔵「明治大学創立80周年記念 アラスカ展」参照)。
- (22) 『明治大学百年史』第四巻、七〇七頁。
- (23) 同右。
- (24) 渡辺操、岡正雄、杉原莊介編著『アラスカ』古今書院、一九六一年。
- (25) 「記念大学祭プログラム」(『明治大学百年史』第二巻、二〇七～二二二頁)。
- (26) 「明治大学創立一〇〇周年記念事業推進要綱」(『明治大学百年史』第二巻、一四六七～一四六八頁)。
- (27) 『明治大学創立一〇〇周年記念講演集』明治大学、一九八〇年。
- (28) 『學術調査研究報告書』明治大学創立一〇〇周年記念事業學術調査委員会編、一九八三年。
- (29) 浜本武雄「創立百周年記念學術叢書の刊行にあたって」(明治大学創立一〇〇周年記念學術叢書出版委員会編、岸本辰雄講述『商法講義 上』所収)。
- (30) タイトルは『商法講義 上』(岸本辰雄講述、一九八一年、『商法講義 下』(岸本辰雄講述、一九八二年)、『仏国商法講義・法学通論』(一九八四年、岸本辰雄講述)、『刑法正義』(一九八四年、宮城浩蔵著)、『仏国民法講義』(矢代操講述、一九八五年)、『法律の道德との関係・法学通論』(一九八四年、鶴沢総明著)、『法律哲学』(一九八三年、鶴沢総明著)。いずれも明治大学創立一〇〇周年記念學術叢書出版委員会編)。
- (31) 『明治大学広報』第四八五号(二〇〇一年四月一日号)。
- (32) 「俸給給料賞与手当額取調表」(『明治大学百年史』第一巻、四〇五頁)。
- (33) 飯澤文夫「書誌調査からみた尾佐竹猛」(明治大学史資料センター編『尾佐竹猛研究』所収、日本経済評論社、二〇〇七年)。
- (34) 鈴木秀幸「大学史展の歩み―明治大学の場合」(歴史編纂事務室『歴史編纂事務室報告』第三集所収、二〇〇二年)。
- (35) 明治大学史資料センター編『尾佐竹猛研究』、日本経済評論社、二〇〇七年。
- (36) 明治大学史資料センター監修『尾佐竹猛著作集』全二四巻、ゆまに書房、二〇〇五～二〇〇六年。
- (37) 明治大学史資料センター所蔵資料。No.12405。
- (38) 「近世文化展覧会陳列目録」は、前掲鈴木論文「大学史展の歩み―明治大学の場合」内で紹介されている。
- (39) 鈴木秀幸「大学史展の歩み―明治大学の場合」(歴史編纂事務室『歴史編纂事務室報告』第三集所収、二〇〇二年)。
- (40) 同右。
- (41) 同右。
- (42) 「大学祭は終わったけれどーうわさ話あれこれ」(『駿台論潮』第六巻第一号、明治大学学生雑誌部、一九五一年)。
- (43) 同右。
- (44) 鈴木秀幸「明治大学百年史」編纂と「明治大学の歴史展」について(明治大学百年史編纂委員会編『明治大学史紀要』第二号所収、一九九四年)。
- (45) 鈴木秀幸「大学史展の歩み―明治大学の場合」(歴史編纂事務室『歴史編纂事務室報告』第三集所収、二〇〇二年)。
- (46) 漠然という「大学史」の定義づけは難しい。さしあたり、現在の明治大学史資料センターが担っている諸活動を包括したとと定義づけたいが、その広がりについてはさまざまな可能性を秘めている。ここで全てを述べることはできないので、鈴木秀幸「大学史活動の広がり」(『広島大学文書館紀要』第七号所収、二〇〇五年)を参照してほしい。